
星の夢をみる - a dreamy little girl have a planetary dream. -

左右 央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと空想少女はこの星の夢をみる・a dreamy little girl have a planetary dream・

【Nコード】

N3643Y

【作者名】

左右 央

【あらすじ】

世界は終わってしまった。

壊れた街も、街道も、修繕する人々はもういない。

かつて耕し豊作を願った畑も、作りかけたシチューも、

それを楽しみにしていた人々は、もういない。

けれど、生き残ったわずかな人々は。

それでもまだ、こうして、生きている。

たとえこの世界が、あとわずかの命でも
前を向いて、生きている。

だから、少しだけの希望を胸に。

青年は、ぼろぼろのサイドカーで。

少女と一緒に、少女の故郷を探す旅をしている。

紹介（ここではあらずじや各話のキーワード、人物情報などが更新されていきます）

<内容>

旅するファンタジーです。

世界は終わってしまった。

壊れた街も、街道も、修繕する人々はもういない。

かつて耕し豊作を願った畑も、作りかけたシチューも、

それを楽しみにしていた人々は、もういない。

けれど、生き残ったわずかな人々は。

それでもまだ、こうして、生きている。

たとえこの世界が、あとわずかの命でも。

前を向いて、生きている。

だから、少しだけの希望を胸に。

青年は、ぼろぼろのサイドカーで。

少女と一緒に、少女の故郷を探す旅をしている。

<世界>

西の帝国と、東の共和国があった。

大きな戦争が終わって間もない世界。技術という技術がすべて失われてしまっているため、どこがどのようになっているか、まるでわからない。かつては、現代（私たちの世界のこと）よりも少しだけ進んだ技術を持った文明が築かれていた。それと同時に科学では証明できない現象もある程度あったらしい。

一話：帝国中部にあるレンスクの街を目指す二人。そこに待ち構えていたものは、戦争の爪痕であるワイヤートラップと、巨大植物だ

った。レンスクへ到着した二人だったが……3へ。

キーワード。

巨大食人植物 > 自生していたわけが、3で明らかになります。

お星様 > 星型ペンダントで、スライド式のロケットになっている。
中に入っていた写真は……？3で明らかになります。

< 人物紹介 >

レイチエル：穏やかな性格の二十代前半の青年。元パイロット。女
みたいな自分の名前と空が嫌い。自分のことを凡庸だと思っている。
それは、戦争で多くの仲間を失ってしまったせい。

リムセ：十歳に満たない褐色の少女。夢を見る空想少女。不思議な
力が少しだけあるが、まだ誰もそれは知らない。不思議な力は、こ
の世界に影響を与えるものとして、かつて実験の対象にされていた。
レイチエルが知っているのは、リムセがどこから連れてこられて、
実験させられていたことだけ。

不思議な力は今後どんどん明らかになっていきます。

随時更新していきます。

プロローグ

—— 三人称。終焉の世界。絵本の切れ端が示す現実。見上げれば、

満天の夜空——

世界は滅びました。

人々は多くの国同士で争っていました。

自然と、そのようになることが仕組まれていたかのように、世界中で戦争が起きました。

人々は野を焼き、山を焼き、海を赤に染め、気がついたときには世界は滅びていました。

暗闇の中。

残りわずかになった炎が揺れた。

組んでいた薪がかすかに音を立てて崩れる。

深い闇に包まれた森の中に再び静寂が戻った。

「……世界は、」

とても幼い、声変わりする前の少女の声が、不意に冷えた空気を揺らした。

「……まだ寝てなかったのかい？」

途切れた声を拾うように、優しい男性の声が続いた。

低くもなく高くもない、若い、落ち着いた声だ。

「……うん。本を読んでいた」

いつかの宿屋の屑箱に捨ててあった、数枚の紙切れのことだろう。

少女はそれを持ってきていた。

空を飛ぶ船、大地を平す車、信じられないほどの無数の人。

それは、青年にとって、記憶に新しい戦争を記した絵本の切れ端だ。

教訓本として書かれたものと思われるが、肝心の続きは残念ながら、なくなっている。

野宿は数日間続いていた。

炎を見つめることしかすることがないこんな夜は、きまって毎晩、少女は同じ質問をしていた。

だから、これから少女が口にする言葉を、青年はわかっている。

「そう……、それで……？」

手を取るように言葉の続きを促し、青年は夜空を見た。

木々の間からぼっかりと見える夜空には、数日ぶりに星が瞬いていた。

星のかけらが大河のようになって、こちらに向かって降ってくるようだ。

「……この世界は、滅んだのか？」

意外なほど。

酷く不安げな声音に、青年は火の元の向こう側に目をやった。

パチン。

と、薪が乾いた音をあげる。運命にあらがうかのように、執念深く。

けれど、炎はもうすでに、消えかかっている。

少女の顔を照らす余力もなく、青年がとらえたのは少女の着た、膨らみのあるドレスと、琥珀色の瞳。

少女のシルエットは、ふるふると、揺れているようにも見えた。

「……滅んじやいないさ」

青年は、消えていく炎を見つめながら、自分に言い聞かせるように言った。

「本当か？」

「本当さ」

「嘘か？」

「僕は、嘘は嫌いさ」

炎が消えた。

寸刻の無音のあと、衣擦れの音がした。

サイドカーにもたれかかっていた青年のそばに、少女が移動したのだ。

青年の左胸の辺りを枕にして、少女はもたれかかる。

晩夏の夜は冷える。

青年には少女の体温が心地よかった。けれど、左手で少女を包み込むことはしない。

しては、ならない。

「心臓の音……」

「ああ……」

こうやって、体温を感じ合えているうちは。

世界は滅んでいない、そう思える。思えてしまふ。希望だ。

けれど、青年は、世界の存在の証明に、少女との繋がりをうい
い。

しては、いけない。

これ以上、言葉を紡げずにいると。

すう、すう。

と、少女の寝息が聞こえてきた。

もう一度、見上げた夜空は、いつもより綺麗だった。

いつかは終わらせなければならない、旅の途中。

けれど、なぜか。

このまま朝が来なければいい。

そう願って、青年も、目を閉じた――

第一話 「二人のロケット」 1

——三人称。青年と少女の旅。空を飛べない飛行士は地べたを這いずり回る。褐色の肌を持つ異国の少女は、飛べない飛行士を信じている。——

青々した草が茂った丘を二分する様に、土がむき出しの道が延びている。

その道をぼろぼろのサイドカーがゆつたりと進んでいた。

ゆつたりと、ゆつくりと、とても遅いスピードで、サイドカーは進んでいる。

ときおり唸りをあげるエンジン音や、車体のきしむ音が、ちよつとだけ、痛々しい。

今にも壊れそうだ。

「——ふうん……ん」

そのサイドカーの助手席に体を沈めた少女は、猫のように大きく上空に伸びをして、隣の青年に目をやった。年齢は両の手で数えられるほど。

黒のヘッドドレスで覆われた癖のある灰褐色の髪が、風に弄ばれるように、後方にひらひらと舞っている。

少女の名前は、リムセ。

やや色の濃い肌や、瞳、座っていても、ふんわりとした幾重にも重なったレース付きのドレスを着ていてもわかるしなやかな肢体は、どこことなく、隣の肌の白い青年とは、生まれ育った環境が違ふことを感じさせる。

精巧に作られた褐色の着せ替え人形のような少女は、その小さな口

をわずかに動かした。

「この先に街なんかあるのか？」

まとった雰囲気を追いついていないような、ぶっきらぼうな口調で。

稚氣いっぱいに笑えば花も恥じらう笑顔だろうその横顔も、今は唇を尖らせ、だだをこねる寸前の子供。

「あるよ。宿屋の主人が嘘をついていなければね」

「嘘ついていたらどうするのか？」

「それはないと思うけど……貴重な燃料も分けてもらえたのだし」
進むスピードに似合わない唸り声が、エンジンから漏れた。

こうして燃費の悪いボロのサイドカーで、数日間も走れるなんて親切以外の何物でもない。

のろのろした速度で走っているせいか、運転席に跨がった青年は、少女の問いかけに律儀に横を向き、答えている。

「来た道を戻って、つるし上げて、問い詰める。とか、しないのか？」

唇を尖らせるリムセに、青年は苦笑した。

「リムセ……そんな酷いことはしないよ」

エンジンがもう一度唸りをあげた。リムセはその音にビクッと体全体を震わせた。不安そうに。

「怒ったのか？」

「怒ってないよ。それに地形は変わってしまったているけど、この丘には見覚えがある。この丘を越えれば、レンスクの街だ。間違いないよ」

「レイチエルも嘘をつくのか？」

「僕は、嘘は嫌いだ」

リムセは頷き、深く座り直した。

青年は大きめのハンチング帽を目深にかぶっていて、表情のすべてを見ることはできそうにないが、その顔はとても穏やかなものだ。若い、ただ幼さはなく、歳は二十歳前後だろうか。年の割にはし

かし、落ち着きすぎている印象だ。声の印象がそうさせている。

青年の名前は、レイチエル。

レイチエルは、元帝国空軍所属の兵士だ。

生きることには必死で、気がつけば、戦争末期には少佐にまで昇格していた。

けれど、戦争が終わってしまえば、そんな肩書きは意味がなかった。

そもそも、こんな若造に少佐の位がまわってくるほど、人材が不足していたというだけ。

レイチエルは自覚している。名ばかり少佐だったということくらい。

「レンスクの街には何があるのだろう」

思わず漏れたリムセの独り言に、レイチエルは丁寧に応える。

「……そうだなあ。僕が小さい頃に訪れたときの記憶しかないから、定かではないけど、パンが美味しかったかな。都市の城壁の周りは一帯が麦畑だったんだ。黄金色で、綺麗だったんだよ」

戦争が起こる前の、淡い記憶を手繰り寄せる。

城塞都市として名を馳せた、重厚な作りの街、レンスク。

確か、街の名にもなっている、レンスク公爵が街と畑、すべてをひつくるめた一帯を、管理していたはずだ。

「それ、リムセも見られるか？」

「ああ……そうだな。まだ収穫時期だろうから、見られると思うよ」

「そうか。それは楽しみだ」

目を細めて嬉しそうにするリムセ。それを見て、レイチエルは言葉を読み込んだ。

あまりにも、安請け合いか。

戦時中にこのレンスクのある地は訪れたことはないが、もし戦禍に巻き込まれていたら、その黄金色の絨毯を見ることが叶わないかもしれない。

もしかしたら、街だって――

嘘は、つきたくない。レイチエルはそう心に留めている。それ故に、どう言葉を続ければいいか、逡巡してしまう。

真実も、時には、嘘以上に他人を傷つけるからだ。

「うわっ」

すると、突如、目の前に現れた光を帯びた何かにレイチエルは気がついた。

ブレーキを力一杯、握りしめる。

「うわうわ！ どうしたのか！」

跳ね上がったリムセの頭をレイチエルは平手で押さえつけた。

「むぎゅい」

と、カエルが潰れたような声をあげるリムセを庇うように、右にハンドルを切って、サイドカーを横滑りさせた。

もしも、サイドカーがもっと速く走れるものだったら、間に合わなかったかもしれない。

レイチエルは、詰めていた呼吸を一気に吐き出した。

瞬間的に集中すると、息を止める癖がある。繊細な技術が、直接、生死を分かちパイロット故か。

レイチエルが見たものは、日光に反射する、細いワイヤーだった。それはちょうどレイチエルの胴体を輪切りにできる位置に貼られていた。

このまま進んでいれば、レイチエルは上半身と下半身で分断され、そして、リムセの首が飛んでいた。

ワイヤーの両端には金属製のポールが立てられており、その幅は数十メートルになる。

まるで戦時中を思わせるトラップだ。

戦時中は、進軍を少しでも遅延させるために、このようなトラップを仕掛けることがある。

このワイヤーはその名残だ。

「……ブービートラップだ」

「ブヒ……？」

リムセは頭を押さえつけられたせい、目尻に涙を溜めながらも、聞き慣れない言葉に首をかしげた。

いらぬ知識を植え付けるようで、説明することをはばかれるレイチエルだったが、今後のことを考えて、説明することを決めた。今度は優しく頭を撫でながら。

「ブービートラップ。怖い悪戯だよ。このワイヤーに気がつかないまま走っていたら、怪我をするところだった」

まだ幼いリムセにわかりやすく説明をする。怪我の度合いは伏せつつも。

「そんなことをしたら、痛いな！ イケナイことだな！」

それでも、わかってくれたようで。

眉間に浅くしわを寄せるリムセに、レイチエルは微笑んだ。

「そうだな。イケナイことだ。あやうく僕達も怪我をするところだった」

大げさに肩をすくめてみせる。

戦争の名残に命を奪われるわけにはいかない。

戦争はもう終わったのだから。例えこの世界が、戦争前のように上手いかわなくても、戦争の爪痕で命を落とすようなことがあつてはならない。

レイチエルは思う。自分の命はともかく、この横にいる子だけは、特に。

微笑みながらも、レイチエルは冷静に丘の上から、麦畑が広がっているはずの平野を見渡した。

しかし、そこには、あるはずの麦畑がなかった。

あるのは、雑多な草原。ずっと前から、人の手が入った形跡がまるでなかった。

ブービートラップが目の前に飛び込んできたときから、うすうす勘付いてはいた。

けれど、自分の言葉を嘘にしくなかつたからか、あまり詮索できなかつた。

この地も、戦禍の中心地になっていたのだ。

それも地上戦だ。進軍を遅らせるためのワイヤートラップがその事実を確かなものになっている。

リムセにどう説明するか悩んでいると。

「キレイ！」

思いもしなかった言葉を、リムセから聞いた。

気がつけば、リムセはサイドカーの助手席から降り、ワイヤーを潜り抜け、平野を一望していた。

「リムセ、危ない」

レイチエルはサイドカーから飛び降りて、リムセの肩を抱き留めた。

それから。

「なにが、キレイだったんだ？」

訊いてみる。

「レイチエル、ほら、見えないのか？」

背伸びするように、リムセは眼前に広がる光景に指をさした。

「うわぁ……」

レイチエルの感嘆の声は、リムセの感動とはまるで違うものだった。

麦でできた黄金の絨毯の代わりにあったもの。

伸び放題の雑草と。

そして、無数に、縦横無尽に張り巡らされた、ワイヤーの数々だった。

ワイヤーは太陽の光を反射し、まるで露草のような光の粒を無数に湛えていた。

「この辺りで、ゲリラ戦があったんだ……」

思わず声に出してしまってから、「あっ」と口を噤む。

「な？ キレイだろ？ キラキラしている！ お星様のオアシスだ！」

お星様のオアシスカ……。

レイチエルは内心ほつとした。

この子には、戦争の実態をすべて教えるには、まだ体が小さすぎる。

リムセには、抱えきれない事実が大きすぎる。

だから、こんなふうなうちは、彼女の世界を見る瞳を、曇らせる必要はない。

「もしかして、夜以外にお星様が空にいないのは、ここで休憩しているからなのかもしれない！ レイチエル、これは大発見かもしれない！」

「かもしれないな」

浮き足立つリムセに、レイチエルは顔をほころばせた。

「お星様！ 捕まえるぞ！ レイチエル、逃げられる前に、はやくはやく！」

「なんで、逃げるんだ」

「お星様は恥ずかしがり屋だからだ！ 友達になろうって言う！」

「友達を捕まえたりしたらかわいそうだろう？」

リムセは聞く耳を持たずに、レイチエルの腕の中で、くるりと体を捻り、器用にすり抜けると。

サイドカーにぴよんと、飛び乗った。

遅れてポリウムのあるワンピースが着地する。

サイドカーの側面をバシバシと叩き、催促する。

「馬じゃないんだからさ、壊れてしまうよ」

「いいから！」

「よくはないんだけどなあ……」

まあ、ひとりで勝手に駆け出さなかっただけよかったと、レイチエルは息を吐いた。

リムセは麦畑のことも、頭から離れているようで、それも少しだけ安心したが、しかし。

嘘を謝らなければならない。麦畑を楽しみにされてしまった以上

は。

レイチエルは、わずかな希望を持って、平野の向こう側も、注意深く観察した。

すると、城塞都市の城壁の名残だろうか。

ちんまりとはしているが、記憶の底に眠っていた風景と一致する建物が目に入った。

城塞都市の中心部に位置していたはずの、公爵の屋敷だ。

それから、その奥、街並みと麦畑が広がっていた。

なんだ。戦禍は免れていたのか。さすが、城塞都市と言ったところか。

レイチエルは肩の荷が下りたような気持ちになった。

もしかしたら、レンスクの街の場所を記憶違いしていたのかもしれない。

子供だったし、いい加減で当たり前だ。

街を指すにしても、リムセの言うお星様探しをするにしても、このワイヤーが張り巡らされた厄介な平野は越えなければいけない。

レイチエルはサイドカーの荷台の蓋を開けた。

鉄製の鍋と、ゴーグルを取り出した。ゴーグルは、飛行機に乗るときにしていたものだ。

「でも、探検の前には、装備が付き物なんだ」

そう言って、ゴーグルのバンドを絞り、リムセにしてやった。

「お、お？」

不思議そうにゴーグルをいじるリムセに。

「これは、お星様を発見するのに役に立つ」

「おお！」

なぜか両手をバンザイするリムセ。おそらく、喜びを表現しているのだろう。

そして、レイチエルは鍋をリムセのヘッドドレスがずれないように、かぶせてやった。

「お星様は、恥ずかしがり屋なんだろ？ 顔を隠していた方が捕ま

「えやすい」

「おおおお！ レイチエルは天才！」

喜んでくれたようだし、準備はいいか。

これで、頭を守るし、目も守れる。

あとは、レイチエル自身が運転に細心の注意を払えば、問題はなさそうだ。

「さ、あの向こう側に街があるから、そこを目指しながら、お星様を捕まえようか、リムセ」

「おう！ 出発だ！」

光の粒をまとった平野へ向けて坂を下り始める。
握ったアクセルが大きな音を立てた。

——三人称。突如現れた巨大迷路。リムセの探す、お星様。お腹を空かせた住人と二人。――

「前が見えないかもしれない……お星様はかくれんぼをしているのか？」

むすつとした声に、レイチエルは振り向いた。

リムセは頬を膨らませている。

ゴーグル越しに見ているから、視界不良、と言っわけではない。

「……かもしれない、どころじゃないな……これは」

レイチエルは律儀に言葉を返した。穏やかに受け答えをしているものの、しかし、胸中は焦燥していた。

リムセが不機嫌な理由。

リムセの言う『お星様』はもちろんあるわけもないのだけれど。もう一つ。

途端に視界が悪くなったのだ。

まるで、天然の迷路に迷い込んだかのように。

これ以上、先へ進むことを、この地が拒んでいるかのようにさえ思えてくる。

風向きも、向かい風にすっかり変化して、その拒絶感を後押ししている。

レイチエルは、リムセに悟られないように、下唇をきつめに噛んだ。

ゴーグルをつけていないレイチエルでさえ、卒倒しそうなのだ。丘の上から見た限りでは、ここまで雑草の背丈が高いとは、予想

もつかなかった。

いや、レイチエルからしてみれば、平野に入り込んでから、雑草が途端に大きくなったようにさえ思える。

ワイヤーの張られている箇所を注意深く観察しながら進んでいたため、いつから今の状況に陥ったのかはわからないが。自分の平凡さを、思い知らされた気分だ。

レイチエルとリムセを乗せたサイドカーは、ワイヤーを注意深く探し、回避しつつ、平野を進んで間もなく、道に迷ったのだ。複雑に入り組んだ雑草の迷路のせいで。

雑草と言うと少し誤解がある。

サイドカーの行く手を阻むものは、まるで、木の幹を彷彿とさせる、巨大植物だった。

レイチエルは、ワイヤーの手前で、サイドカーを一度止めた。

そして、自分の背丈の倍はあるうかというほどよく伸び、青々とした茎の根元を睨み付けた。

そのまま、視線をあげてゆくと、剣のような鋭い葉と、頭を垂らさずにピンと伸びきった穂が目に入った。

大きな、麦……に、見えなくもない。

そんな見たことがないくらい大きな植物が、行く手を阻んでいた。それが、前方にずっと続いている。

複雑に入り乱れて……、「もしかもしゃしているな」不意なリムセの言葉に頷いた。

もしかもしゃだけならまだいい。

この巨大な植物に隠れるように、ワイヤーが仕込まれているから、たまったものではない。

「レイチエル。この木はなんだろう？　突然、生えてきた気がする」

リムセは興味があるのか、頬の空気を抜いて、訊いた。

「これは木ではないよ。幹ではないだろ？　どちらかというと……草本だよ。茎が馬鹿みたいに太いんだ」

「ソーホン？」

「草のことだよ。足下のタンポポと一緒にさ」

「これがか？ こいつらは、馬鹿なのか？」

レイチエルはものやわらかに笑った。

「違うよ。……木に見えてしまうほど、とっても太い茎を持っているけど、タンポポとかと同じ仲間なんだ」

と、レイチエルはリムセの頭に乗った鍋を外してやった。ゴ―グルは、気に入ったらしい。もう返してもらえないかもしれないけれど、自分よりも大切に使うてくれそうだし、普段は使わないものだから、あるべき姿、とレイチエルは、リムセの頭を撫でてやった。

しかし。

しかし、とレイチエルは思う。

軍にいた頃から、たびたびサバイバル経験はあった。それに、大学にも在籍していたから、ある程度学識もあるけれど、こんな巨大な植物は初めて見た。専門分野は違えど、親友の付き添いのような感覚で、農法を学んでいたのだから、それなりの知識を有するのに、この植物をレイチエルは知らない。

ましてや、幼少期にここを訪れた頃にはなかったのだ。

あれば記憶に残るだろうし、間違いない。それほどまでに、周囲を覆う光景は印象的なのだ。

どちらかと言えば、危機感が募るような、そんな印象。

そんなレイチエルを意に介さないのか、リムセは得心したのか、仲間か。タンポポと友達か。リムセとも友達になれるだろうか。

友達になればお星様の居場所を教えてくれるのだろうか。なあ、レイチエル」

「……ん。まあ、彼らがお星様の居場所を知っていればだけ……」
「さつきから……、さつきから、こいつらのそばにお星様が見えるんだ。だから友達だ。でも、リムセが近づくと、お星様はいなくなつて、ワイヤーが出てくる。ワイヤーはきつと、友達ではないとい

うシルシなのかもしれない。友達になるのは、難しいのだろうか……」

だからではないけれど、言葉も選ばなければな、と、しばし反省した。

わかりやすい説明というものは難しい。

この子と旅をするようになってから、身にしみるほど学んだことだ。

帝国大学では学べなかったことを、皮肉にも世界が終わった今、学んでいる。

この子はまだ、現実と虚構の間の世界で生きている。

お星様の落しどころをどうすればいいのだろうか、これも困る。

誤魔化すことも本当であればしたくない。

リムセがお星様と言うのを正すことは簡単だ。

けれど、正しいいいものかどうか、レイチエルにはわからない。それを嘘と判断するかどうかも。

陰がだいぶ濃い。レイチエルは一度、考えることをやめた。

日もだいぶ翳ってきているのだ。

日が傾けば、日光を遮る植物があるここは、光が入りにくなる。

日が沈めば、ここを抜け出すことが、さらに困難になりそうだ。

早急な判断をせねばならない。

「リムセ、明日また、ここを訪れてもいいから、まずはゆっくりと休める場所を探さないか？ 北北西へ進めば、さつき丘の上から見えたレンスクの街に出れるはずなんだ。いいかな？」

方位磁石をコートのポケットから取り出し、方位を確認する。

太陽の傾きからいつて、あと一時間程度で、ここも暗くなるだろう。街から街へ移動するレイチエルはあまり時計を見ない。現地入りして、その街の標準時に合わせないと、時間という概念がすぐに狂ってしまうからだ。もちろん軍の支給品だったデジタル時計や懐中時計を持つてはいる。けれど、いわゆる電波時計だった。ただ、

肝心の電波塔は、戦争で壊滅している。技術という技術はもう、正直当てにならないものになってしまっている。

体で感じたものがすべて。

信じることのできるものだ。

「お星様と遊びたいぞ」

リムセは、やはり、といった様子で、今にもだだをこねてしまいそう。

「でも、遊ぶには元気がないと。僕はもうお腹が空いて、大変だ」

「お腹……？」

すると、きゅう……と、リムセのお腹が鳴った。

そろそろ、間食したくなる時間なのだ。

それを自覚させてやれば、体は正直に反応する。

リムセの腹時計はいつも、正確なのだ。健康な証拠である。

「……うん。そうする。リムセもお腹空いた」

「それじゃあ、またこれ被って。レンスクの街まで急ごうか」

鍋をまた優しく被せる。そのうち、どこかでヘルメットを調度できれば、と思いながら。

レイチエルは、少しだけ、さっきよりもうまく立ち回れる気がしていた。

ヒントはリムセがくれた。

いや、なにも難しくはない。簡単なことだ。

お星様を避けていけばいいのだ。光の粒は、ワイヤーがもたらすものだ。だったら、そこを迂回し、ワイヤーと繋がっているポールを巻くように、向こう側へ進めばいい。それに気がつかせてくれたのはリムセなのは、紛う方なし事実で、やはり身の丈に合っていない旅をしているということを思い知らされるけれど。

「さて、行こうか」

レイチエルは進路を定めた。

リムセを故郷まで届けると誓った、あの日の自分は、決して嘘偽りなどではない。

平凡だろうと凡庸だろうと、身の程を知らない背伸び野郎だと死んでいった軍の仲間と言われようと。

リムセが自分を見る目が変わらない内は、リムセを絶望させてはなるまいのだ。

なにがあっても。

なにがあってもだ。

この世界と幻想をまどろむ瞳で見つめることのできるリムセには、できるならば、希望を抱いたまま生きて欲しいから。

だから、リムセが、この世界のことを、直視した途端に、旅が終わりそうな気もしている。

そのくらい、この世界の有様は、深刻なものなのだ。レイチエルも全貌が掴めないくらいの被害を被ったのだ。

それに、自分の木偶の坊つぷりを壁に向かって嘆いても、誰も肩を抱いてはくれない。

慰めて欲しいのか、と訊かれても、それはまるで違う感情だ。

向かう先は、棺の中ではないのだ。死んで幸せになろうとは、もう思わない。

大げさなエンジン音をとどろかせて、サイドカーが数回、上下に震えた。

「お前の寿命はまだまだ先だ……。よろしく頼むぞ、じいさん……」

もしサイドカーに耳と口があったなら「まだまだ現役だ阿保」と、罵声が飛んできそうだ。

こんなふうと思うようになったのも、リムセの影響かもしれない。

「ちよつと待って欲しい」

リムセはゴーグルを首へと降ろした。

そして、ぴよいつと、リムセがサイドカーから飛び降りた。降り立った中腰の姿勢のまますぐに、巨大植物の根元ま駆けてゆく。慌ててレイチエルも飛び降りる。リムセは根元にかがみ込んで、なにやら拾い上げ。

「お星様！」

くるつと振り返り、小さな手をめいっばい開いて、差し出してくる。

「……お星様？」

出来の悪い鸚鵡のように繰り返す。褐色の肌に映える白い歯が、リムセからこぼれた。

立ち膝になつて手のひらを覗き込むと、星形の金属製の何かが乗せられていた。

大きさはリムセの手のひらに収まるくらい。

「お星様だ！ やっぱりここはお星様の住処だったのだな！ これでお友達か！？ リムセとお星様はお友達か！？」

瞳の中にも、くず星が現れそうなくらいの笑顔が咲く。

と、レイチエルはその星に先端のひとつに、わっかがついていることに気がついた。

「ああ、これでお友達じゃないか。よかったな
それから。」

「僕にも見せてくれないか？」

ペンダントか、何かだろうと思ひ、手を差し出すと、リムセに手を引っ込められてしまった。

「めっ！」

「めっ、て……どうして？」

「まだ駄目だ。この子は怪我をしている。だから、こんなところで寝ていたのだ。これは、リムセが夜までに治療してやるのだ。その後、夜空の仲間の元へ送り出してやる」

「えー」

苦笑しつつ、立ち上がり、腰に手を当てる。我ながら似合わないか。

ここにペンダントらしきものが落ちているということは、人が通ったと考へても無理ではない。道らしき道はとうになくなっていたが、この辺りを住処にしている人か、もしくはレンスクの街の住人

が間違いなくいることを表している。その予測しうる事実が、安堵の薬となった。

「子供っぽいぞ、レイチエル」

言いながら、リムセはドレスの腰に括り付けたフェルトのポーチに、『お星様』を大切にそうにしまった。

その姿が最も愛らしい子供らしさの化身だというのに。

「治療が終わったら僕とも友達になってくれるように、言っておいてくれよ」

「もちろんだ。一緒に見送るつもりだ。でも、フクザツコッセツをしているからな。ヒトスジナワではいかないかもしれない」

片言の言葉で、難しいことを言う。どこでこんな言葉を覚えてくるのか。

四六時中一緒にいても、レイチエルの知らないところで、しっかりと成長しているということか。

と、そのときだった。

違和感よりも先に、恐怖を全身で感じたのだ。

まるで銃口を突きつけられたときの、あの身の縮まる感覚。

初めて銃口を突きつけられたのは、敵地だった。なにも知らない学生上がりの若造が、いきなり戦地——それも敵地で、氷点下のような腫をしたゲリラ兵に、鉛の切っ先を刃のごとく向けられてもしてみるところを想像して欲しい。まさに体験したのはそれだった。

戦争を経験したことのない人々にも、懇切丁寧、わかりやすいし、決まって口を揃えて言うに違いない。

『逃げられる、わけがない』

レイチエルが鉛の熱さを初めて味わったのは、左肩。

訓練は受けていた。だから、油の切れたブリキ人形よりはマシに動いたつもりだった。つもりなだけで、肩を撃ち抜かれてはいるけれど、訓練がなかったらと思うと……思いたくない。心臓が胸の内側で針で突かれた風船のように、破裂していただろう。

その恐怖が、脊髄を、粘質を伴って、這い上がるように、全身を

支配した。

勘に近いものだ。

だから、レイチエルは、咄嗟に、リムセを抱き寄せて、体を捻るようにして、右方向へ転がった。

そこへ。

くぐもった轟音が振り下ろされた。

巨大植物だ。巨大植物が鉄槌のごとく、しなりを加えた重たい一撃を見舞ってきたのだ。

生物とは思えない軋む音を響かせて、起き上がる。見れば、一撃を加えられた地面は、べこりと凹んでいた。凹んでいた、というよりは、えぐり取られたようになっていた。

当たっていれば、破裂していたとしか、思えない。

「な、なん、なんなん、なん……っ!？」

息が上手く吸えないリムセを、レイチエルは抱き上げる。

「嘘だろ……?」

「はう、あう、あう……っ。痛い……痛いレイチエ……ひうううっ!？」

リムセの悲鳴。その視線の先。

レイチエルは、一瞬だけ、我が目を疑った。

ぐっばあ、と穂先が、星形に開いたのだ。まるでこれから二人を捕食するかのように。

内側には、鋭い歯が並んでいる。粘液のようなものが、したたり落ちる。

これは、疑えば消えてなくなるものじゃない。どうしようもなく、現実だ。

現役を退いても、生存本能までは失っていなかったようだ。サイドカーまで行くのに、コンマ数秒もかからなかった。エンジンはかったままだ。リムセを自分の前に、こちらに向けて跨がらせ、しがみつかせる。

一気にアクセルをふかし、急発進する。ご老体にはきついかもしれ

れないが、こうでもしないと、間食の餌食になる。

「喰われてたまるかよっ！」

突きのような攻撃を、ドリフトすることで、半円を描き、間一髪で避けた。

そのまま巨大植物を縫うように進む。

しかし、安心はまるでできなかった。攻撃を仕掛けてくるのは、あ的一本だけではなかった。

状況が悪化している。

乱れた呼吸を整えさせてくれるわけはなく、我こそはと、待ち構えているかのように、巨大植物の頭が砲弾のように降り注ぐ。

スピードが出れば、もう少しうまく回避できようものの、このままではそのうち後手に回りかねない。

と、嫌なイメージは払拭できなければ現実になりやすいのかもしれない。そんな冷静さを一瞬だけ取り戻せるかのような間の後、サイドカーの近くに穂先が着弾した。

地震のような揺れがその穂先を中心に、広がる。

サイドカーが跳ね上がった。そして、突き刺さるように地面にホイルから激突する。震動が背中に伝わってくる。

「痛ええ！ やらせるかよっ！」

「に、逃げる！ 逃げる逃げる！」

「わかってる！ リムセしっかり捕まっているよ！」

「うん、お星様を救うぞ！」

こんなときにまで、この子は。どこまでも。

その一言が、レイチェルに冷静さを取り戻させた。肩の力が抜けたのだ。

視界が、視認できる情報量が、広がる。

逃げたって、出口はわからない。それに、むやみに逃げれば、ワイヤーにひっかかる。

どうする？ ……と、前方にはボールが見える。ワイヤーも光の粒のおかげで、見える。

見えなければ、自ら輪切りになりに行っていた。

水平に、綺麗に、真っ二つだ。

「輪切り？ …… そうか、輪切りだ！」

レイチエルは叫んだ。レイチエルの顔を見上げるリムセの頭を自分の胸に押し当てた。表情は、どんな表情をしているか、わからない。不安か、絶望か、それとも、希望か。

「リムセ…… 絶対に離すなよ。…… それから、僕を信じろ」

コートに顔を埋めたまま、ぐしぐしと頷くリムセ。その確かな感覚に、レイチエルは口を真一文字に引き締めた。集中しているときの、癖みたいなものだ。

（あとは僕次第だ）

レイチエルはポールに向かって突き進む、ポールの太さは、手で握ることがたやすい太さだ。

（抜けるのか？）

やってみるしかない。肩の脱臼か、ポールが抜けるか、賭だ。力点の位置を調節すれば、自分以上の力を加えることは可能だ。

また近くに穂先が落ちる。けれど、レイチエルには、ポールしか見えていない。

真っ直ぐに。ただひたすら真っ直ぐに。

走りながら、体の少し前方の位置で、肘に力を込めて、ポールを掴んだ。

遠心力を利用して、斜めに体を差し込む。全体重をポールにかける。

「うおおおっ！」

かけ声に比例するように、体が軋みをあげる。

しかし、レイチエルの肩が抜ける前に、ボコンとポールが抜けた。「よし！」

レイチエルはそれを持ったまま、ワイヤーに張りを持たせたまま、サイドカーで円を描く。

一本目の巨大植物に、食い込む。すると、あっさりと、それは切

れてゆく。

予想通りだ。これが、茎ではなく、木だったら、万事休すだったかもしれない。

後方で、地面に倒れる激しい音が響く。

しかし、レイチエルはサイドカーを停止させない。そのままアクセルを握りしめ、走り続ける。

次々と、ワイヤーをカッター代わりにして、巨大植物を切り倒す。倒れた柱のようなそれは、ワイヤーの届かない穂にも、もたれかかり、その重さでまるでドミノのように倒れてゆく。

すっかり一周したところで、土埃が盛大に舞い始め、しかし、その代わり、太陽の光が強くなった。

空を覆うものがなくなったのだ。

そこでようやくレイチエルはボールを投げ捨てた。そして、サイドカーをゆっくりと止めた。

土埃がようやく収まったところで、レイチエルはリムセに声をかけた。

「もう、大丈夫だよ、リムセ」

穏やかな表情で。

「……おお？」

景色がまるで違うせいか、リムセはまだ状況を飲み込めないらしい。

「リムセ」

名を呼び、切り株のようになった茎を指さし、微笑んでみせる。

「お星様を狙う悪者を……やっつけたのか？」

「そうだよ」

「レイチエルが……？」

頷くレイチエル。リムセはいまだにきょとんとしている。

ぽつかりと、平坦になった平野の向こうには、レンスクの街が見える。

円上に切り倒した外側も、すっかり、綺麗さっぱり、巨大植物は

倒れていた。

なぎ倒された茎を迂回するように行けば、そんなに遠くはなさそうだ。

レイチエルは胸一杯に空気を吸い込んだ。太陽の匂いを久しぶりに嗅いだ気分だ。

「リムセ、怪我はないかい？」

背中をさすってやる。

「大丈夫。……しかし、びっくりしたな」

リムセはけろりと、ぶっきらぼうに言った。

「それだけ？」

思った以上に冷静に返されて。

「僕の方がびっくりだよ。はは」

レイチエルは声をあげて笑ってしまった。

こんなふうな危機的状況は、旅をはじめてから、一度もなかったから。

それに、この植物のことを知っていれば、すぐに対処できたかもしれないというのに。

知らなかったばかりに、リムセに怖い思いをさせてしまった。

それは、悔やんでも悔やんでも、悔やみきれないことだ。

だから、どんなふうに説明をすればよいか、考えていたというのに。

「お星様の治療をしなきゃ」

そんなことを平然と、当たり前のように言うのける。そして。

「……もしかしてっ！」

リムセは大きな声をあげて、やがて、レイチエルの胸の中でかすかに震えた。

「他のお星様は、あいつらに食べられたかもしれない！」

自分の身よりも、どこまでも、お星様想いで。

リムセにとって、そっちのほうが、事の重大さが優先されてしまふのだ。

だから、レイチエルは、そんなリムセを包み込むように、優しく諭すように。

「そんなことはないよ。夜になれば、またお星様は空にのぼる。夜になればわかるから、安心して夜を待とう？ リムセがそんなふうにお星様を想ってあげているんだ、きつと……いや、絶対に無事さ」
「本当か？」

見上げられた瞳は、かすかに潤んでいた。

切迫した想いが、今にもあふれ出しそうだ。

「ああ、本当さ」

リムセの瞳を優しく見つめる。

「嘘じゃない……のだな」

「リムセ」

筋になつて頬を伝う滴を、親指で優しくすくい取ってやった。

「席に着けるか？」

訊くと、リムセは自分の手の甲で目元をこしこしと擦り、

「うん。……お腹空いた」

褐色の艶肌。目元を少しだけ赤くさせて。

「うん……、美味しいパンを買いに行こうか」

リムセは笑った。

今の今まで感じる事がなかった西からの季節風に、リムセの灰褐色の髪がなびく。

だから、レイチエルは何度だって、リムセに笑顔にさせられる。

今だって、あんな九死に一生を得たような、あんなことがあった後だって、こうして笑っている。

とても不思議なことだ。だから、レイチエルは、自然と、前向きになれるのだろうか。

「……お星様の治療するんじゃないのか？」

「どっちもするよ！」

万歳をするリムセ。レイチエルはそんなリムセを抱き上げて、サイドカーへ下ろしてやった。

今までの光景がまるで嘘だったかのように、夢だったかのように、視界はとても良好だ。

日は順調に傾きつつあり、橙色の光源が低い位置から溶けるように混じり始めた。

遠くの麦畑の色がより濃く、黄金色に見える。

この地方特有の、麦の色だ。

レイチエルは酷使しすぎたサイドカーをいたわるように、ゆっくりと走らせ始めた。

「そういえば、鍋がないな……」

「あ、鍋、ないな……」

ふと呟いたのはほぼ同時。口調もまるで家族のように、全く一緒だった。

けれど、お互いにそれは、気がついていない。

レイチエルは思う。落としたのは、いつか。

サイドカーで激走しているときか、もしくはその前の、リムセを抱きかかえて転がったときか、どちらにせよ、鍋をなくしてしまったようだった。

「探すのは、ちょっと無理があるか……街で鍋買わないとなあ」

無駄な出費がかさんでしまうと、レイチエルは心の中でため息をついた。

実際、インフレもインフレで、紙幣は意味がないわけで、物々交換のほうが今では一般的になってしまっているけれど、一体何と交換してくれるやら。鍋は一つしかないし、あれがなければ野宿した際に、食べ物煮ることができない……。かなり重要なポジションを任されていた万能戦士だったのに。

「別に、リムセはゴーグルがあればいいぞ
そう言つて。」

リムセは首にさげてあったゴーグルをスチャット、装着した。とても満足そうである。

「鍋は帽子のことじゃないんだけどなあ」

時間があれば鍋を探しに戻ってこよう。そう誓うレイチエルだった。

やがて、平野を抜け、サイドカーはレンスクへと入ってゆく……。すべては、リムセの故郷の手がかりを探すため。本当の家族の元へ、届けるため。

——三人称。森を抜けた先、孤立したニルンベルク旧市街地もしくはカルカソンヌ。若く美しい公爵夫人は麦畑。——

レンスクの街に入って、すぐに目についたのは、レンスク公爵の屋敷である。

日はもうすっかり沈み、サイドカーのヘッドライトだけが、確かな灯りとして、街を映し出している。

この街は、帝国の交易網からやや外れた地域にある。

つまり、田舎。

公爵の屋敷以外にもいくつか煉瓦造りの家々はやや寂しげに立ち並んでいたが、それでも、かつての帝都と比べれば、田舎である。それに、幼い頃の記憶よりも街全体が小さく感じるのは、レイチエルが大きくなったからかもしれない。

レンスクの街は、大陸西の端に位置する帝都から、今はなき鉄道で山を越え、一時間半ほど。

レイチエル達は道なき道を進み、なんども昼と夜を繰り返している。

戦争ですべてが機能しなくなってしまったからだ。

ちよつとした郊外への旅程も、かつての帝国では考えられないほど、手軽ではない。

寺院や、地主が一箇所に集まり、周囲を城壁で囲んだところからこの街は発展をしていった。

公爵の屋敷は荘厳な作りで、立てられた当時に一世を風靡していた様式美をふんだんに取り入れた、城のような作りになっている。

大きなアーチを構えた木製の扉には繊細な彫刻が施され、それを支える柱は中腹がややぼつてりと膨らみ、美に対する細やかな気配りと、同じ街に住む住人に対する寛容さが両立している。

その荘厳さ故、城ではないが、城塞と呼ばれ、また、街を囲う壁も相まって、城塞都市と呼ばれていた。

住人は、寺院の教えに柔順で、折り目正しいということを、レイチエルはわずかながら覚えていた。

それを街の印象と併せて、閉鎖的、とも捉えることができるかもしれないが、帝都という、人が多く殺伐とした雰囲気の中で育ったレイチエルには、とても新鮮だった。

幼い頃の、戦前の記憶だ。

穏やかな人々の表情に、それを包み込む麦畑。

胸の一部が、今でも熱を帯びるような感覚。

確か、旅行の途中に立ち寄ったのだ。今とはまるで意味合いの異なる、旅行で。

このわき上がる感情は、きっとリムセにはない。

だから、レイチエルは、リムセにせめてもの思い出をと思い、告げる。

「リムセ、パン屋を探してみようか。来る前にも一度話したけど、ここはパンが美味しいんだ。リムセもきつと気に入るはずさ」

サイドカーを降り、リムセの手をとる。

リムセはそれに従い、降り、頷いた。

お腹空いた、という、困った顔をしている。

「でも、レイチエル。窓に明かりがついていない。お留守なんじゃないのか。パン屋もお留守なんじゃ」

「いわれてみればそうなんだよな。まさか……」

レイチエルは口を閉じた。

これ以上は、口にしてはならない、と思った。

「さっきのに食べられたのか？」

さっきの、というのは巨大植物のこと。しかし、まさか独りでに

歩けるようなものではなかったのだから、それはないだろう。レイチエルは、戦禍が酷く、ここも街ごと捨ててしまったのではないか、と思った。だから口を閉ざして、リムセになにも言えなかった。

「まだ日も暮れて間もないからね、これからつけるんじゃないか？
少し歩いてみよう」

「歩くのか……？ もうリムセはお腹ぺこぺこだ」

リムセは等身大の子供らしく、だだをこねた。

もう歩けない、としゃがみ込む。

おんぶかだつこでもして、探すしかないか……。

レイチエルが困り果てていると、遠くの暗がりから、灯りが一つ、こちらへ近づくように大きくなって来ていることに気がついた。

「うん？」

高くない位置から足下を照らすような三角錐型の光が左右に揺れながら、こちらへ。

それは、小型のサーチライトだった。

誰かが懐中電灯かなにかを持って、足下を照らしながらこちらに近づいてくる。

「レイチエル、あれはなんだ？ こっちへふわふわやってくるぞ…

…まさか、幽霊？」

リムセはぎゅむっとコートの裾を掴んだ。レイチエルの体に顔を半分隠す。

「いや、誰かこちらへ来てるんだ、……幽霊だなんてそんなものじゃないよ、……って」

しかし、レイチエルは頭ごなしに訂正することをやめた。

幽霊ではなかったが、見たこともない巨大な植物に襲われて間もないのだ。

だから、幽霊でなかったにしても、警戒したほうがいいと、判断した。

リムセの背中に手を回し、体に密着させる。いつでも抱えて逃げられる準備は怠らない。

むき出しの土を踏む音が、夜闇に拡散する。

「……あら？」

誰の声か。

女性のものだった。

リムセではない。もっと年上の、成熟した落ち着きのある声。

レイチエルの目の前には、作業着に身を包み、長いブロンドの髪を丁寧につめた大人の女性が立たずんでいた。歳はレイチエルとさほど変わらない印象だ。彼女は、驚いた顔で。

「……あなた方は？」

驚き、というよりも、当惑したような、そんな表情をした。

まさか、この地に、自分以外の誰かがいることを予期していなかったかのような。

「ああ、失礼……」

確かに自分たちは怪しいかもしれない。レイチエルはそう思った。この街の様子、女性の表情、察するに、レイチエルとリムセはこの場にとつての異物だ。

レイチエルは、昔のように、表情を堅くし、声を静かに、かつ張りを持たせて、敬礼した。

「失礼。僕はグラナディア帝国空軍第十三遊撃小隊所属、レイチエル・アルトキウムラスと申します。それから、こちらはリムセ」

「……………（こくこく）」

リムセは目の前の女性を幽霊といまだに疑っているのかもしれない。その証拠に、コートを握った褐色の手は、やや震えている。対して女性は色白の肌やブロンドの髪に良く馴染む、薄い緑色をした瞳を数回瞬いた。口元に手を置き、あくまでも上品に、目の前の青年の言葉の意味を噛みしめているように。

その仕草がレイチエルに、目の前の女性に作業着が似合わない、と思わせた。

ところどころ土で汚れているけれど、あまりにも体が華奢だ。ガラス細工のような手は、麦の束よりも重いものを持ったことがない

とさえ錯覚させる。

「軍人様……なのですね」

「元、がつきますが……」

自嘲を軽く含ませて、肩をすくめた。まさか、軍人に敬称がつくとは思わなかった。

「ああ、そうですね。戦争はもう終わりましたものね」

戦争が終わっても軍人は軍人でしかないのですよ。とは、言えずにいると。

どこか寂しげに、繊細さを極めた女性は、レイチエルのことを見つめたまま睫毛を震わせた。

特に、レイチエルを伺っているような、そんな面持ちだ。だから、レイチエルは見つめられたことによる場違いな照れを隠すように。

「僕達は旅をしていまして、帝都グラナディアから来ました。……

昔ここを訪れたことがあるのですが、さほど変わらずに戦禍を免れたとお見受けしました。丘の上からも麦畑が見えましたし、街としてまだ機能しているんですね。あなたはもしかや麦畑で作業されていたのでは？」

賛辞を込めて、抑揚をつけて言葉を弾ませる。けれど、紳士としての振る舞いは及第点にも届かない、とレイチエルは思った。余計に顔が熱くなる。

すると、女性は嫺やかに。

「まあ、そうでしたの。いかにも、私は農作業をしていましたわ」
口元を隠して微笑んだ。

偏見かもしれないが、その農作業の似合わない口調と仕草は、即席で作ったものには思えない。

しかし、優しげなのどこか、ひんやりとした印象だった。

レイチエルは不思議に思っていると。

「私は、ダナ・レンスクです。歓迎いたしますわ、アルトキウムラス少尉、それから、リムセさん」

両手を胸元に置き、美しい姿勢で、一礼した。

「レンスク……？　もしや、レンスク公爵夫人でしたか？」

「ええ、そうですね。もうお忘れになったのですか？」

懇ろな間柄だったかのように、姿勢を正し、麗しく微笑みをたたえる。

夫人と呼ぶには、差し支えがありそうなほど、若々しく、艶やかだ。

しかし、よどみなく肯定するレンスク夫人を疑う余地はなかった。確か、父親とともにここを訪れた戦前から結婚をすでにしていたはずだ。だから、目の前の同年代に見える女性は、一回りか、二回り、歳が離れていることになる。

あの頃、年端のいかなかった坊やだったにしても、この美貌は忘れそうにないものだが、レイチエルの記憶にはない。衝撃的で記憶ごと吹き飛んだのかもしれない。

あまりにも衝撃的な美しさに、絶句しそうになっていると。

「こんな田舎街ではお見せする場所もなにもありませんから、もしよろしければ、ご一緒に夕飯でもいかがですか？　夫もアルトキウムラス様と知れば、喜ぶはずです」

「……いえ、そんな、滅相もない」

火照ったままの顔の前で両手を振った。

ほとんど反射的だった。

日中だったら、表情がもっとわかってしまうわけで、夜でよかったと心底思う。

確かに、父親と、レンスク公爵は旧知の仲だった。それは、覚えていた。

幼い頃の記憶だけでは、二人にどのような繋がりがあったのかはわからないけれど、しかし、今までほとんど関わりのなかった子にまでそんなによくしてもらっているのだろうか。

お茶を濁したような態度をしてみたが、しかし、レンスク夫人は嫌な顔一つせず。

「お連れ様はもう、お腹と背中がくっついてしまいそうだと、鳴い

ていますわ」

きゆう。

と、リムセのお腹が鳴った。

「……あう、……レイチエル……」

そして、かぷりと、コートの端っこを、唇ではむリムセに、レイチエルは降参した。

急速に、体が芯から冷えていく。本来の目的をリムセに噛みしめられたような気分になった。

「それは食べ物じゃない。……わかったよ、せつかくだし、お言葉に甘えさせて貰おうか」

「やつぱあ」

ぱつと離して、ようやくレイチエルの横に並んだ。しかし、レイチエル以外の人に慣れないのか、数回空気を掴んだ手は、やがてすっかりとレイチエルの手を捕らえた。夫人はそれを見て。

「かわいいお連れ様ですね」

うらやましそうに見つめる夫人に、レイチエルはぎこちなく笑い返した。

一着しか持っていないコートが駄目になってしまう。

まあ、唾液でどうこうなるということでもないのだけれど、気の持ちようの問題で。

それに、リムセにこれ以上辛い思いをさせるのは、教育方針から外れる。

そもそも、レイチエルだって空腹の限界は過ぎていた。

そんな二人の様子を察したのか。

「案内いたしますわ。こちらへどうぞ。私が焼きたてのパンと料理を振る舞いますわ」

作業服姿の夫人は、ドレスを着ているみたいに、優雅に体を翻した。

——三人称。レンスク公爵の屋敷。暖かい夕食と、約束と、秘密と。旅の理由を語る飛べない飛行士。――

「美味しかった……！　ほくほくで、とろとろで、ぷりぷりだった！」

すっかり緊張を緩和させたリムセは、食卓で万歳をした。

「ぷ、ぷりぷり……？」

夕食は焼きたてのバター風味のパンと、よく煮込まれたビーフシチュー。

なにをもってぷりぷりなのだ。レイチエルは首をかしげた。

「あらあら」

おおきな食卓の向こう側で、レンスク夫人は我が子を見るような目で、優しく見つめている。

とても楽しげだ。やはり、作った本人は、誰かに食べて喜んで貰うことが、いちばん嬉しいのだろう。

「ぷりぷり……」

リムセは、スプーンをくわえたまま頬杖をついて、今まで見せたこともないうつとり顔をした。

しかし、さすがにそれは。

「行儀が悪いよ。リムセ」

隣に座ったレイチエルは、ナプキンで口元をぬぐい、リムセに囁く。けれど、聞き分け悪く、リムセは立ち上がると、駆け足で夫人の元へ寄っていき、スプーンをタクトのようにふりながら、なにや

ら夕食の感想を話し始めた。

人見知りのくせに、打ち解ければこの有様。小動物のように夫人に懐いている。

レイチエルは、やれやれと、首を持ち上げた。

とても高い天井が目に入る。内装も、とても豪華だ。置物ひとつひとつが、高そうな代物で、触ることはまず絶対にはいけないと、わかるほどだった。金でできた大きな驚の置物が特に目を引いた。大きさはリムセほどある。

それにしても、そういった貴金属は軍の兵器に還元するために、没収がかかったはずである。

もしかしたら、隠していた、とも考えられるが。

それにしても、屋敷の外壁も、内装も、戦争の爪痕がすっかりなくなっていた。

人は、荒廃した世界においても、こんなふうに、よみがえることは可能なんだと思わせてくれる、希望が感じられる。

リムセにも、なんとなくいいから、そういう強さというものを、感じ取ってもらえれば、とレイチエルは目をつむった。

「食後の、コーヒーですわ」

気がつけば、レンスク夫人はコーヒーを運んでいた。香ばしい薫りが、湯気に乗って胸を満たす。

「リムセさんには、絞りたてのオレンジジュースですわ」

「おお！ オレンジジュース……！ オレンジジュースだ……！ シヤヤセモノだ！」

「大袈裟だなあ……」

「シヤヤセに大袈裟はないぞー！」
爛爛と目を光らせるリムセ。

「まあ、リムセの言うとおりだよ。幸せは幸せだね。感謝して、味わって頂こう」

二人そろって、食前にした祈りと同様に、もう一度祈りを捧げる。しかし、リムセは、大興奮である。お腹が満たされた直後だから

か、いつもよりもテンションが高めだ。まあ、数十分もしたら、おねむになるのは見え見えだけれど。

ともあれ、嬉しそうにしている顔を見ると、やはり同じように嬉しく感じる。

共感できるとか、共有できるとか、戦争が終わって、なにもかもが終わっても、人の心は終わっていないというか。だめだ。夜は、内側に物事を考えていってしまう。

「どうぞ、召し上がってください。角砂糖はお使いに？」

「いえ、このままで」

促されるまま、レイチエルはコーヒーを含んで。

「至れり尽くせりで、なんだか、申し訳ないです」

対面に座った夫人は、角砂糖を三個入れて、かき混ぜた。レイチエルは伏せ目がちに、そこに目をやりながら。

「小さい頃の記憶じゃないですが、でも、やはりレンスクの街は、いつまでも変わっていません。父もこの光景を見ることができれば、さぞ喜んだでしょう」

戦争で亡き者になった父親を久しぶりに思い出した。

「いえ、私も、申し訳ないと思ひまして……」

夫人は、角砂糖をもう一つ入れた。

「ん？」

「夫ですよ。仕事が片付かないと言って聞かなくて。頑固なんですよ。こだわりの強い、というか」

「ああ、いえ、いいんですよ。レンスク公爵も多忙なのは存じています」

それに、正直あまり顔を覚えていないし、とは言えず、コーヒーを多めに口を含む。一息ついて。

「きつと、この治めている地に、愛着があるのでしょうか。それは、誇るべきところですよ」

心から、そう思う。

リムセはストローで遊ぶことなく、オレンジジュースに夢中にな

ったまま。

レイチエルは思う。

戦後、間もないのだ。

だから、この地を治める公爵が多忙なのは察しがつく。

一刻も早く、復興したいのだろう。それは、この地を愛しているから。

それに、無理を言っただけで面会したところで、思い出話に花を咲かせることも危ういのに、むしろ、助かったと思っている。父親の代役がその息子でも、役者として、成立しない。端役は端役だ。

「しかし、今さら、なぜ旅を？」

視線が合う。ぞくりと、背筋が泡立ったのを感じた。男性を見る目、とても言うのだろうか。

レンスク夫人は作業着のままだったことに、今更気がつく。しかし、その服さえもドレスシーに感じるほどの豊かな胸元が強調されているような気がする。表情豊かな、美しい顔つきで、少しだけ心配するような、そんな憂いも感じる。

「……世界を見て回ったアルトキウムラス様が今更、なぜ旅を？」

言い終わって、夫人はコーヒーをすすった。

終わった世界を旅する意味を問われているのだと、レイチエルは思った。

「それは……」

父に連れられて周遊したのは、正直あまり記憶にないから。は理由にならないだろう。

当時と、今ではあまりに世界が食い違う。

その二つの世界を比較するため、と言うわけにもいかないだろう。なにせ覚えていないのだから。

レイチエルは、レンスク夫人の宝石のような瞳に負けた。正直、とても魅力的な人なのだ。

「約束です」

「約束？」

「僕は、リムセと約束をしたんですよ。この子の故郷を探すと。それから、もう一人、同じ約束をした同僚も。だから、旅をしているんです。必ずこの子の生まれ育った故郷を探して、送り届けるつもりです」

「ずずず、とオレンジジュースを飲みきった少女の、灰褐色の髪の毛をレイチエルは力強く撫でた。

コップを両手で持ったまま、リムセは琥珀色の瞳を細めた。

戦争を生き抜いたたったひとりの仲間と、帝都で交わした約束を思い出す。

リムセを故郷へ連れて帰る意味。この世界を終わらせないためにも、果たさなければならぬ。

リムセは帝都に囚われていた。

いまだに、なぜ、リムセが帝都にいたのかは、わからない。わかるうえにも、その約束をした同僚は、もういない。

けれど、それがわからなくなつて、わかることくらいある。

家族に会いたいって思う気持ちくらいは、レイチエルにだって、痛いくらいに理解できた。

色々なモノを失って、気がついた、確かな痛みだ。

こんなに傷つかなければわからないような痛みなら、気がつきたくなかつたけれど、同じ想いをリムセにはして欲しくないから。

だから、リムセと旅をしている。

それはレイチエルにとって、じゅうぶん過ぎるほど、じゅうぶんな理由だ。

「……そうだったのですね。……少し踏み込んで聞き過ぎたでしょうか？ 申し訳ありません」

やや気まずそうに。だから、レイチエルは首を横に振った。

「いえ、そんなことはありません。……レンスク公爵夫人が気に病むことはありません」

「……ならば、ダナと呼んでください」

「はい？」

唐突なそれでいて今まででいちばん寂しげな口調に、思わず、レイチェルは聞き返した。

真っ直ぐな瞳がこちらに向けられている。

しかし、すぐに、ふっと視線を外された。

「……いえ、気にしないでください。……そうだ。夫に夕飯を運ばなければなりませんので、私はこれで。部屋は二階の客間をお使いください。客間にはシャワーも湯船も完備してますので、ご自由にお使いくださいね……、では、失礼します」

立ち上がり、一礼をする。そしてそそくさと奥のキッチンへと引っ込んでしまった。

レイチェルは、引っかけりを感じながらも、気がつけばゆっくりと舟を漕ぎはじめたリムセを起こし、二階へ足を向けた。

後には、キッチンからは、なにも聞こえてこない……。

5（第一話・了）

——三人称。二人のロケット。二人の絆。不思議な力が奇跡を起こす。演者になった飛行士は、空想少女とともに、ロケットを夜空に打ち上げる。――

客間は、それだけで一般的な家のリビングほどあるのではないか
と思えるような、広さだった。

すっかり寝てしまったリムセを、その客間のサイズに合わせた大
きすぎるベッドに横たえてやり、レイチエルはそのままベッドに腰
掛けた。スプリングの強い、高級ベッドだった。客間に置くにはし
かし勿体ないと思えてしまうほど。

壁際をぐるっと見渡せば、高級そうな家具や、もう今のネットワ
ークでは使うことのできないシート型の大型スクリーンやPCがあ
つらえてあった。前時代的と言えば聞こえは悪いけれど、その実、
前時代よりも今――戦後の今の方が、文明レベルが退化しているか
ら、言葉には強烈な矛盾を覚える。

その戦前の文化に懐かしさを覚えながら。

レイチエルは、そのベッドに沈むように、思考した。

色々と、考えなければならなかった。

最優先で、リムセの外見から判断して何か知っていることがあれ
ば聞きたかったが、先ほど突然のように話を打ち切られてしまった
から、これは後回しになってしまった。それは明日、街中を散策し
ながら情報収集すればいいか。

他にも、たとえばサイドカーの給油、この街の周囲一帯の情報か
ら、次に目指す街をどこにするか……、考えれば限らないのだが、

しかし、レイチェルは、心の隙間が埋まらないような、すぐような、そんな違和感を感じていた。

違和感は、レンスク公爵夫人からだ。とりわけ、夫人の、現実離れた若さは、驚くばかりだ。さすがに生きていれば自分の母親にも匹敵する年齢のはずなのに、あの若さと美貌は常軌を逸している。そして、どこか寂しさを感じるのだ。

寂しさ。

悲壮さ、といった、寂しさ。

思い詰めた覚悟のような気概を、なぜかその寂しさから、感じたのだ。

あれはなんだったのだろうと、やはり気になってしまう。

それと同時に、あの宝石のような瞳は、自分の後ろ側を見られているような、そんな感じだった。

けれど、それは、夫人から感じる違和感のすべてではないような気がした。

もっと別の何かがありそうな。

まさか……と思う。

シャワーにでも入るか、と手を後ろにやったところで、かたいなにかにぶつかった。

「……『お星様』、か」

それは、リムセが巨大植物のふもとで見つけたものだった。

「治してあげるって言ってたのになぁ……」

なんとなく、独り言を漏らす。

手にしたのは、星形のペンダントヘッドのようなもの。金属製で、手触りがとてもいい。

結局、リムセはお腹が満腹になってしまって、このことをすっかり忘れてしまっていたようだ。

リムセは平野の途中でこれを見つけたとき、夜空に帰すのだと、意気込んでいた。

けれど、リムセを見ると、幸せそうにすやすやと眠っている。

「いい顔してるし……疲れたんだろうなあ」

初めてリムセに会ったあの日、リムセの浮き世離れした美しさに驚いた。

ミルクをふんだんに使ったチョコレートのような艶のある肌。白い鳩のような、銀色の強い長くて癖のある灰褐色の髪の毛。そして、大きな、琥珀のような、純粹な瞳。

それは、異国の少女。

自分たちとは逆転した体の色使いだから、畏怖を抱くものも少なくなかったという。けれど、不思議とレイチエルはそう感じなかった。

リムセは小さなお腹を呼吸に合わせて上下させ、すやすや。寝る子は育つというのだけれど……。

レイチエルは自分の頭をわしゃわしゃした。

自分のことだけを考えればいいのではないのだ。レイチエルは、常に、二人分、考えなければならない。それに対して放棄したいだとか、拒否したいとは思わないけど、やはり二人分の命を背負い生きるのは、大変で。

なにより、今はまだ、リムセはシャワーも浴びていなければ、歯も磨いていない。

それはいけない。さすがに気持ちよさそうな寝顔を見せつけられて、思わずベッドに寝かせてしまったのは言うまでもないが、しかし。

なんとというか、女の子を預かる身として、やはりきれい好きに育って欲しい。

特に、ここ数日は野宿が続いていた。だから、シャワーにありつくことができるのは、数日ぶりなのだ。

あとで絶対にたたき起こさなければならぬ。

けれど、しばらくはこのまま休ませてあげたくもある。こんなふかふかベッドもなかなかありつけないのだから。

なんだかもう、起こすのだから、起こさないのだから、わからない状

態で。めちゃくちゃである。

珍しくいらいらしながら、ペンダントヘッドのようなものをいじる。

すると、そのペンダントヘッドが二枚貝のように、二つのパーツが重なり合っていることに気がついた。

ビスのようなもので一箇所だけ固定されていて、動かすことができる。

レイチエルはそれを横にスライドさせると、中から小さなポートライトがでてきた。

星形のペンダントヘッドのようなものは、写真を差し込むことのできるロケットだったのだ。

レイチエルは寝転びながら、その写真をしげしげと眺める。

「……………あつ」

思わず。

大きな声をあげてしまった。

リムセを起こしてしまったかと思い、振り返るが、しかし、「もう、ぷりぷり食べれない……」という寝言だけが帰ってきた。しかし、レイチエルはそんなリムセに和む気分じゃなかった。

血の気が失せていくのが、わかった。頭から、それから持ち上げていた両腕から、温度がなくなっていくような感覚。

そのポートライトには、にわかには信じがたいものが写っていた。それから、ぽとり、と小さく折りたたまれた紙切れが、顔の上に落ちた。

レイチエルは広げてみる。手紙のようだった。レイチエルは読み、そして、驚愕した。

その手紙は、レイチエルの父親がレンスク夫人に宛てたものだった。それだけじゃない。

「……………死んでいる？ まさか、そんなこと、ありえるのか……？」
それは。

今の今までレイチエルが見てきた現実の世界を、すべてを否定す

るような、内容だった。

現実是一片だ。何かがあってれば、何かが間違っている。そんなことは、わかる。

レイチエルは、違和感の根源を察することができた。

それを思い出したレイチエルは、するすると靴紐が解けていくみたいに、夫人の今までの言動に合点がいった。ポートレイトのほうが、正しい現実であることを示していることを同時に示唆していた。当たり前だ。死人は、口を開かない。

ならば、この世界は、リムセがみた夢の世界。それに、レンスクの街の記憶が、まどろみ、溶けた。

にわかには信じられないが、そう考えれば、すべてに説明がつく。演じられるのか……？

やや、乱暴で、不確かなやり方かもしれないけれど。

そうすれば——すべてに説明がつく。

そして、きつと、リムセの不思議な力を、今、身を持って体験していることを証明することになる。

心臓が、痛いくらい鼓動していることに、ようやく気がついた。

これからどうするか、レイチエルはもう一度思考を巡らせ始めた。

「……もうちょつとゆっくりしたかったぞ」

間延びした返事をした後、リムセは大きなあくびをした。目をこしこしとこする。

場所は、客間のシャワールームの一つ手前の、洗濯機のある脱衣所だ。ここもゆつたりとしたスペースが、高級そうな間接照明で彩られている。

「いいかい、リムセ。これは本当のことなんだ。眠たいかもしれないけど」

「うん。とても眠いぞ……」

唇を尖らせるリムセ。

「ごめんごめん」

顔にかかった水滴が苦手なのだろう、目はつむっている。レイチエルは顔についた水滴をハンドタオルで優しく拭き取った。それから、濡れそぼった髪の毛を後ろへ流す。リムセの琥珀色の瞳の上に乗ったうつすらとした眉が不安さを湛えていた。

二人は、ちょうどシャワーからあがったところだった。

レイチエルは逡巡した後、リムセを起こし、シャワーを借りた。実のところ、現実のシャワーなのかどうか怪しかったが、しかし、日中に対峙した巨大植物の質量を考慮すると、あれはどう考えても現実だった。シャワーもノズルから出てくるお湯は温かさを感じられたし、石けんの香りだっただけだ。

空想が、現実には混ざり込む。夢見たものが、現実となる。

これが、リムセの不思議な力。

レイチエルに託された、リムセの力。

それがきつと、ロケットに作用した。

レイチエルは、裸のリムセと向き合った。

備え付けの客用ルームウェアがあつたが、なんとなく、それは使うことはできないと考えたレイチエルは、洗濯機と乾燥機にかけてあつた自分たちの服を取り出し、リムセの下着をリムセに手渡す。

うんしゅんしゅとリムセはそれを身につけた。

その間、着替えをすませたレイチエルは、下着姿のリムセの前でバスタオルを広げた。リムセはとても華奢だ。指一本触れれば折れてしまいそうな小枝のよう。けれど。リムセは全体重を預けるかのように、バスタオルに飛び込んだ。

レイチエルはそのまま受け止めて、頭をこしこしと乾かす。ある程度乾かしたら、何重にもなったドレスを被せる。ぷちぷちとボタンを閉めてやる。そして、鏡台の前に座らせて、髪の毛の癖に合わせてドライヤーをあてる。

ドライヤーをあてながら、レイチエルは、必死に考えたリムセ用

の説明をはじめた。

リムセには、自分で思いついたり、考えついたことを、現実に入らせて、世界のあり方を変質させる力があると、かつての仲間であり友人に、聞かされていた。

それが戦争に利用されようとしていたことも。

どんなふうを利用するのかまでは、まだ実験段階だったこともあり、わからないけれど。

ただし、たぶん今回は、これからレイチエルが考えて、出した答えの話は。

笑顔でしていい話だとレイチエルは信じている。だから、とびきの笑顔を鏡越しに。

「リムセは言っていたよね？ 『お星様』を夜空に帰してあげるつて。リムセが眠っている間にね、僕は『お星様』を空に帰してあげる方法がわかったんだよ」

リムセは大事なことを思い出したとばかりに、顔を輝かせた。

「ほ、本当か！？」

「ああ、本当だよ。このお星様には、乗組員が二人居たんだ。でもね、一人だけ、迷子になってしまったんだ」

「のりくみいん？」

「お星様には人が住んでたんだよ」

ドライヤーを終え、星形のロケットをリムセに手渡す。櫛で優しく髪を梳きながら。

「さて、どうしようか？」

レイチエルは、自分でもなにを言い出しているのか、正直わかっていない。けれど、リムセを預かったとき、かつての仲間が言っていたことが、今ならわかる気がした。

『この子は、半分、空想の世界で生きているの』

今いるこの屋敷は、リムセが空想が生み出した、本来はあり得な

かったもの。

だから。

きつと。

これでいいはずだ。

じゃあ、空想は、どこから始まっていた？

リムセの一言——『お星様』がすべてだ。

『お星様』という言葉が彼女の中で生まれたときから、この空想の世界は拡大した。

リムセの空想の世界と、目で見た現実の世界が、混ざり込んで。そして、この世界に共鳴するように、レンスクの街が——再現された。

レンスクの街に違和感を感じなかったのは、レイチェルの幼少の記憶が曖昧だったため。

だから、どんな街だろうと、城壁と、麦畑らしきものがあれば、レンスクの街と、誤認できた。

この屋敷も、リムセが作り出したものだろう。

どこかで、たとえば絵本で見た何かを参考にして、とか、色々と考えられる。

それにすべては、ポートレートが示している。

「もう一度、聞くよ、リムセ……。きつと、乗組員の一人が迷ってしまったのは、もう一人と喧嘩をして、離ればなれになってしまったからなんだよ。でも、二人は、本当はとっても仲良しなんだ。それは、僕は知っている。リムセなら、どうしてあげたい？」

鏡の向こうのリムセは、笑顔で答えた。

「仲直りだ！」

「ああ、僕と同じ意見だよ」

レイチェルも笑顔で頷いた。

「その『お星様』を、上だけ横にずらしてごらん。乗組員がわかる

ようになっているんだよ」

言われるまま、リムセは親指と人差し指でつまんで、左右に動かした。

ポートレイトがあらわれた。

「……誰だ？」

不思議そうに首をもたげたリムセ。

その人物を、レイチエルは知っている。だから、リムセにもわかるように説明をした。

そこに差し込まれていた写真には――

「ダナさん」

食事の後片付けを終えたダナは、新たな料理を作らずに、一人、寂しげにリビングで座っていた。

青年は、いまだに食卓に座ったままのダナ・レンスク公爵夫人の背後から、語りかけた。

「アルトキウムラス様……ですか？」

「名で呼んでくれませんか？ ……昔のように」

椅子を引いて立ち上がるうとしたレンスク夫人に、青年は言葉を被せて、静止させた。

「……レイチエル様」

レイチエルと呼ばれた青年は頷いた。表情は、陰になってよく見えない。

「様はやめてください。まるで麗しい女性のような。僕はただの、血や泥にまみれることを生業にしまった軍人ですよ。ただの、軍人です。軍人は軍人でしかないのです。最も尊ばれることが似合わない罪深き人間です。それに、そう呼んだら、フロドが嫉妬します」

レイチエルは思い出すように、記憶の糸を手繰り寄せるように、

言葉を紡ぐ。

「お見通しなのですね」

「僕にも妻と息子がいるのです。出汁に使わないでくださいよ」

「では、『少尉』と呼ばば？」

『少尉』か。とレイチエルは思った。初めて会ったとき、レイチエルは『少尉』と呼ばれた。しかし、レイチエルは『少佐』だったのだ。『少尉』は、レイチエル・アルトキウムラス・ジュニアの、父親の階級だ。

目の前のレンスク夫人は、レイチエルのことを、レイチエルの父親に見えていた。それに、父はレイチエルがまだ学生だった頃に、最前線で戦死している。レンスク夫人はその死んだ父親を、レイチエルを通して、見ていた。だから、レイチエルのことを『少尉』と言った。けれど。

「それも違います。僕はもう軍人ではないのです……。死んだ、一人の人間です。伝言を伝えるためにやってきました」

レイチエルは背中に事実を、それでも優しく語りかける。

「そんな、ありえせんわ。嘘を……！」

「嘘ではありません。レイチエル・アルトキウムラスの戦死記録は公式で残っています。その前日に、あなたの最愛の人、フロド・レンスクが戦死したことも、あなたは知っているはずですよ。ダナさん……」

胸を裂くような真実に、悲痛な真実の上に、雪のような冷たい沈黙が降りた。

夫人は手紙を読んで知っていたはずなのだ。

レイチエルの父が夫人に宛てた手紙は、フロド・レンスク公爵の戦死を伝えるものだった。

だから、知った上で、信じられなかったのだろっ。

「……嘘ではないのです。ダナさん、あなたの最愛の人……フロド・レンスクは素晴らしい男だった。僕は彼にとってもよくして貰った。僕には爵位がないにもかかわらずフロドは友として、僕を受け入れ

てくれた。すばらしい人間だった。これは僕が保証します」

レンスク夫人の肩が大きく揺れ出したのが、レイチエルにはわかった。

きつと。

泣いているのだ。

他人に初めて言われて、事実が突き刺さったのだ。

「でも、あの人は……！」

絞り出すような、声で。

「あの人は！ あの人は、私を捨てていきました！ この街と、麦畑と、ありとあらゆるものを投げ捨てて、戦地へ行ってしまった！ レイチエル様にこの気持ちがわかりますか！？ 一人待たされるこの気持ちが！ 次から次へと、街から人が消えていく。気がついてたら私は一人だった！ 私の存在を忘れられていくような、この気持ち、この気持ちが……わかるっていうんですか！」

「あなたを守るためだった」

「きれいな事言わないで！」

バン、とテーブルを拳で打ち付けると、夫人は両手で顔を覆って突っ伏してしまった。

嗚咽混じりの、声にならない声で泣き叫んだ。

「戦争を終わらせることが、僕とフロドの最大の願いだった」

「……そんな願い！」

レンスク夫人は立ち上がり、きつとレイチエルを睨み付けた。気圧されてしまいそうな、殺気に似た感情。

「私はあの人がそばにいてくれればなにもいらなかったのに！ 一人にしないで……一人ぼちはもうたくさんです……」

自分のことを知っている人間が周囲から消えていく恐怖。

孤独は、存在を忘れられているのと同じだ。

それは戦争の最前線で生き残っていったレイチエルも酷く共感できることだった。

人は、一人では生きていけない。その現実を、もう一度、まざま

ざと突き付けられるかのようにレンスク夫人はレイチエルをその美しい瞳に憎悪を滾らせて睨み付ける。

レンスク夫人も、孤独だったのだ。

愛する人も、知り合いも、すべてを戦争が飲み込んでいったから。独りぼっちになってしまったから。

「私は、彼のことを一度だって忘れてない！　なのに、彼は死んでしまった！　死んでしまったらもう、私のことは忘れてしまう！　私は忘れないのに！　忘れることなんか、できやしないのに！　…私を…、私を一人にしないで…、私のことを見つけてください…、私のことを忘れないでください…　私はあなたのことを忘れやしないのですから！」

レンスク夫人はその場に崩れ落ちてしまった。

だから、レイチエルは、死者の伝言を届ける。

届かなかった想いを。数年の時を越えて。リムセの、不思議な力が呼び起こした奇跡を無駄にしないために。

「フロドも、ダナさんのことを忘れてなんかいません。今でもあなたのことを、愛してる」

レイチエルは、言い切った。

「そんなの、証明できるって言つのですか……」

「違います」

レイチエルはリムセの背中に手をやった。

「あなたは、夫に愛されていたことを証明したかったのではないのではないですか？」

「どうして……それを？」

今まで見守っていたリムセが、星形のロケットを、夫人の手を取って、手渡した。

「……これは」

「あなたは、フロドに愛されていたことをよく僕に自慢してくれていたじゃないですか。だから、僕は手紙にフロドの想いをしたためた。たとえ辛くても、あなたなら……でも、ここも戦場になってい

たのですね。僕は知りませんでした」

レイチエルの言葉とは裏腹に。

レンスク夫人の表情に、晴れ間がさしたのを、レイチエルはしっかりと感じた。

大丈夫。間違っていなかった。レイチエルは、穏やかに言う。

「それは、リムセが麦畑で拾ったのです。あなたのロケットですね？」

「リムセが見つけたのだ。おっきな、にゅーってしたの、そばにあったのだ」

ひよいひよいとリムセはレンスク夫人の顔を覗き込んだ。その様子を見て、レンスク夫人も少しだけ落ち着いたようだ。

「はい、そうでしたか……」

レンスク夫人は震える手でロケットをスライドさせ、ポートレイトを見つめた。

けれど、すぐに、レンスク夫人の表情が、くしゃくしゃにゆがんだ。

静かに頬を伝う滴が、作業着のパンツに、落ちる。

「……ずっとずっと、昔のことのような気がしますわ。これであるのもとへ、行けるのですね」

ロケットの中には――

フロド・レンスク公爵と、ダナ公爵夫人の、二人で写った写真が入っていた。

穏やかな表情で。とても幸せそうに表情をほころばせて。

けれど、目の前の夫人の姿とは、違う。写真の夫人に、若々しさは、なかった。それでも、気品漂うその美貌は健在だった。彼女もずっと前に、死んでいた。

レンスクの街も、戦場になっていた。平野に張り巡らされたワイヤートラップはそれを物語っていた。

巨大植物が生えていたところは、元々一面麦畑だったのだろう。レンスク夫人は、もしかしたら、戦禍を逃れようと、その麦畑を逃

げているときに、このロケットを落としてしまったのかもしれない。
そしてそのまま――

ずっと探し続けていた。

死んでも尚、ずっと。

愛する夫を亡くしたから。せめて夫と繋がれる、ロケットを。

きつと、作業着を着ていたのも。

農作業をしていたのではなく、どこかへ行ってしまった二人のロケットを、探していたから。

「ダナさん。あなたは、忘れられることが嫌だったのではないのではないのですね。あなたは、愛する人を忘れることが怖かった。死んでしまったら、なにもかも忘れてしまうと思っていたあなたは、自分が死んでも、それでも忘れないたために、二人の絆^{ロケット}を探していた……」

レイチエルは胸が詰まりそうだった。

込み上げてくる溢れそうな想いを必死に抑えようと下唇を噛んだ。戦場で散っていった自分の父親も、そんなふうに家族のことを想っていたのだろうか。

どんな想いで、死んでいったのだろうか。

きつと、そう想っていてくれたに、違いない。

フロド・レンスク公爵の死去を伝える手紙をその妻へ送った父親は、誰よりも友人想いで、家族想いだったと。間違いなく、偉大な父親だった。そう思えた。

「――これで」

リムセが、涙を流すレンスク夫人の手をもう一度取った。

「これでもう、ダナは、迷わないか？ 喧嘩、終わったのか？ 仲直り、したか？」

潤んだ瞳でレンスク夫人を覗き込む。

「……喧嘩なんかしていませんわ。ずっとずっと仲良しでしたもの。レイチエル様に仲を取り持たれてから、ずっと」

レイチエルはどきりとした。レンスク夫人に見つめられたからだ。

濡れた瞳でレンスク夫人は言う。

「……また、お世話になってしまいましたね」
「いえ」

昔、喧嘩の仲裁にでも入ったことがあるのだろうか、とレイチエルは考えた。

「あなたにも、もう一度会えて良かった」
そして。

「うわうっ！」
ぎゅうっと、リムセはレンスク夫人に抱きしめられた。

「……ありがとうございます。リムセさん」
夫人らしい、落ち着いた声音だった。

「もう大丈夫ですね。……それから、レイチエル様も、ありがとうございます」
「ございました」

途端に。

レンスク夫人から、光の泡が漏れた。

ふわふわと、その泡は、小さくなってゆく。

それはなぜか、悲しくも、幸せな光景に見えた。

泡は、星屑のように、屋根を越えて、夜空へ。

後に残されたリムセに、レイチエルは駆け寄った。

リムセは尻餅をついて、口をぱくぱく。

「リムセ、大丈夫か？」

「……わかんない」

唇が、震えていた。いつものぶっきらぼうな口調は、そこにはない。

レイチエルはしゃがみ込んだ。

「わかんないけど、悲しいってことだけはわかる……。首の後ろがすごく痛い、痛い……。なのに、綺麗って思えるのは、どうしてだ……」

…？」

何かを我慢しているようなそんな口ぶりだった。

だから、レイチエルは、めいっばい笑った。

悲しいのは、死に触れたからだ。でも、綺麗と思えてしまうのは、レンスク夫妻の心に触れることができたからなんだ。今はまだ、わからなくていい。いつか、リムセにも、死についてしっかりと教えてやらなければならないと、レイチエルは思いながら。

でも今は。

「体がね、泣きたいって、言ってるんだよ。そういうときは、我慢せずに泣いていいんだ。ダナさんにフロドさんがいるように、リムセのそばには、僕が居るから」
すると。

リムセの琥珀色の瞳から、止めどなく、滴が溢れてきた。

大粒の滴は、すぐに一筋の涙になる。

泣き方を知らないように、とても辛そうに泣く小さな体が、なぜだか愛おしくて。

レイチエルはそつと体を寄せて、背中を包んでやった。

その日、リムセの泣く声を、レイチエルは初めて聞いた。

泣き疲れ眠るまでは、しばらくそのまま――

豪快なエンジン音が、麦畑の穂を揺らす。

ただ、そのサイドカーの走る速度は、いささかゆつくりだ。

助手席に体をすっぽりと包み込まれた褐色の少女は、ゴーグル越しに、黄金色の絨毯を見つめていた。

「結局、手がかりは掴めずじまいか。鍋も買えなかったし」

「うむ。誰もいなかったな。とても静かだった」

翌朝、朝焼けとともに活動を開始した二人は、レンスクの街を回ってみた。

けるつとした顔で寝起き開口一番に「お腹空いた」というリムセに、レイチェルは安心した。

言葉にできない気持ちを涙に乗せて、流せたからかもしれない。

街は、ちゃんと存在していた。

しかし、誰も見つけることはできなかった。

リムセの空想にロケットが共鳴してできた街なのだからいなくて当然と言えば当然だ。なぜなら、ロケットの記憶を依代にしているからだ。レイチェルはかつての仲間の説明を思い出しながら、街の様子と照らし合わせた。確か、不確定要素が多いが、そんな理屈だったはずだ。実際に体験することになるなら、もつとしっかりと耳を傾けるべきだったと後悔しつつも。

レンスク夫人が消えたら、街も消滅するのかと思っただけけど、そうではなかった。

今も、遙か後ろに、リムセが思い描いたレンスクの街は、存在している。中途半端に存在する麦畑は、戦禍を免れた元々のものだ。それに寄り添うように、レンスクの街は、今もある。

体を乗り出して後方へ振り返ったリムセを、レイチェルは諭した。

「……リムセ、危ないから、あまり体を乗り出すんじゃないぞ」

リムセと呼ばれた少女は、頬を膨らませて抗議した。

「レイチェル。リムセは、顔しか出してないぞ」

「またいつあの巨大植物がだね……」

言いかけて。

レイチェルは気になっていたことを訊いてみた。

「そういえばさ、リムセは麦のことを、あんな巨大植物だって、思ったりした？　もしかして」

「……違うのか？」

きょとんとされた。

なにを当たり前のことを訊いているのだと言わんばかりの、不満顔だ。

やっぱり思っていたらしい。だから、現実にあられたのかもしれない。

れない。

レイチエルは正直、あの切り株じみた、切り口の気持ち悪さは、トラウマになりそうだった。

また、何かと共鳴を起こして、あんなモンスターじみたものを呼び出されても叶わない。

レイチエルは咳払いを一つ。

サイドカーのスピードを緩めて、脇道に生えた野生化した麦を一本引っこ抜いた。それをリムセに手渡す。

「リムセ、今、その手に握られてるものが麦っていうんだよ。ぐつぱあとか、どかーんとか、ならないんだよ？」

「そんなの当たり前だ。これがどつかーんとか、ぐつぱーとか、なるわけないだろう。なにを子供みたいなことを言っているのだ？」

「え」

「あれは星喰い麦というのだ。お星様を食べる悪い奴らだ」

当たり前のように、リムセは言う。まったく、想像力がたくましいのだ。

しかし、なぜあんなものがあらわれたのか、合点がいった。

どういった理屈であらわれたのかは、やはりわからないが。

もしも法則性や、決まり事があるなら、早急に知る必要があるかもしれないと思った。

リムセのことをもっと知ってやらないと、ならないのだから。

「でもさ、リムセ、そんな怖い奴ら、いないほうがよくないか？」

訊いてみる。

「確かに、そうだな。いないほうが、いい」

「そうだろう？」

レイチエルは思う。

リムセには不思議な力がある。

空想を現実混ぜる力、と言うのだろうか、おそらくそういう力を持っている。

だからこそ、帝都にいた……。

どこから連れてこられて。戦争の道具にされようとしていた。そんなことはもうする必要がない。それに、絶対にレイチエルがそばに居る限りは、させない、とも。

リムセの故郷を探すのと同時に、リムセの力についても調べる必要がある。

帝都に戻ってもよかったが、しかし、帝都は壊滅的な被害を受けている。情報を集めるにも、不足しているかもしれない。ならば、

「リムセ、海は見たことあるかい？」

「うみ？」

ひくつと鼻を動かした。

「ああ、水がたくさんあるところだ。大きな水たまりだよ」

「ないぞ」

琥珀色の瞳が爛爛とした。

「見に行——」「行く」「じゃ——」「行く」「……………」

被せられて、レイチエルは苦笑い。リムセは好奇心のスイッチが入ったらしい。

レイチエルはリムセのヘッドドレスがずれるほど、豪快に頭を撫でてやった。リムセは、

「あうあうあうあうあうあう……」

とか言っている。

港町なら、もしも航路が復活していれば、情報がそこに集まっているかもしれない。

行き先もままならない今、知らない土地に踏み込むのは避けたいとも、レイチエルは思った。

知っている港町へ行こう。

少しだけ、軍人時代の苦い思い出のある、空軍基地のある、帝国南西部に位置する港町へ。

どれほど、被害を受けているのか、どれほど復興しているのかはわからないけれど。

藁にもすがる思いだ。

「うみに行くぞー」

ヘッドドレスをぐしぐし直して、万歳をするリムセ。

実に楽しそうに、リムセは世界を見ている。

二人の旅は、始まったばかり。

5 (第一話・了) (後書き)

次回は第二話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643y/>

きっと空想少女はこの星の夢をみる - a dreamy little girl have a planetary d

2011年11月17日03時14分発行